



夏の日々にクラシックを♪

『森のうた』 岩城 宏之

(スタッフ・I)

音楽を読む



指揮者の岩城宏之さんといえば、エッセイの名手としても有名である。『森のうた』は、山本直純さんとの破天荒かつ愛すべき藝大時代の青春が描かれているが、これが滅法面白い。指揮がしたくて仕方がない二人は「学生の、学生による、学生のためのオーケストラを作ろう」と大義名分を並び立て、自分たちが指揮をするために「学響」を作ってしまう。学響では、定期演奏会の他に藝術祭での特別演奏会があった。物語の最後は、特別演奏会でショスタコーヴィチの「森の歌」を演奏する場面が描かれているのだが、これがとても良い。指揮者修業に奮闘する二人の様子は、普段あまりクラシック音楽を聴かない人にも、音楽の面白さを伝えてくれることだろう。タッチャン小僧風に描写されたという作曲家の林光による解説も必見。

『森のうた』 岩城 宏之
出版社：河出書房新社
請求記号：B762.1/1
中央図書館所蔵あり



ナクソスに
ログインして
アクセス!



当時、世界中で超大ヒットになったという「森の歌」の人気は凄まじく、一度きりの演奏会の描写からもその熱量が伝わってくる。ナクソスミュージックライブラリーでは、ショスタコーヴィチの「森の歌」を聴くことができる。

クラシックにふれよう

モーリス・ラヴェル

(スタッフ・N)

フランスの作曲家モーリス・ラヴェルは、職人気質で緻密な作曲スタイルを特徴とし、卓越したオーケストレーションの技術を駆使して「ボレロ」や「ダフニスとクロエ」といった斬新な作品を発表するなど、生涯において数々の名曲を手掛けた。「オーケストレーションの天才」「管弦楽の魔術師」の異名をもつラヴェルだが、彼の作曲技法は、ピアノ作品にも存分に発揮されている。1901年に作曲した「水の戯れ」は、水の流れや波紋など、水そのものの輝きをピアノで表現していて、聴く人の心に静かな余韻を残し、且つ涼しげなイメージを想起させる曲だ。また、ラヴェルは他にも組曲『鏡』より第3曲「海原の小舟」、『夜のガスパール』より第1曲「水の精」など、水を題材にしたピアノ曲を残している。音色から清涼感を感じることで夏の暑さも和らぐかもしれない。今日のような暑い日にぜひ一度、堪能してみたいだろうか。

ナクソスに
ログインして
アクセス!



「ナクソス・ミュージックライブラリー」ではラヴェル本人から演奏に際しての細かい指示を受けていた「ラヴェル弾き」ヴラド・ペルルミュテルの演奏による「水の戯れ」なども聴いていただけます。ラヴェルはこの曲のおしませを疑問符のようなニュアンスで止めることを望んでいたそうです。「ペルルミュテル」で検索して聴いていただけます。

編集担当のひとこと

まとわりつくような暑さのなか、もはや涼しさを求めることは現代を生きる人にとって必須となっている今日この頃。図書館や家の中で暑さをしのぎながらナクソス・ミュージック・ライブラリーで静かな涼しさを感じてみませんか。おすすめのプレイリストには夏のためのプレイリストもございます。音楽で体感温度を下げて暑さをしのぎましょう。

耳を楽しませる音

(スタッフ・O)

音楽とわたし

バス停から家に帰る道のりの曲がり角のあたりで、時折ピアノの音色が聴こえてくる。最初はCDなどを流しているのかとも思ったが、(あまりにも上手なので)どうやら家の人が弾くピアノの音色である様子。ごくたまにミスタッチや弾き直しがある。そうすると実際に今奏でられている音なのだと感じられる。朝通勤前にも聴こえてくることもある。優雅な朝を過ごされているのだろうか。昔はよく近所から子どものつかえながら弾くピアノの練習の音が聞こえてきたりしていたものだが、最近はスペースの都合や楽器の進化もありヘッドホンで聞いたりしているからだろうか？音が漏れ聴こえてくることも少なくなっている。ピアノの音は耳に心地よく、有難く聴かせてもらっている。こうして音楽や四季折々に花を咲かせる様子を少し楽しみながら通勤できている。

